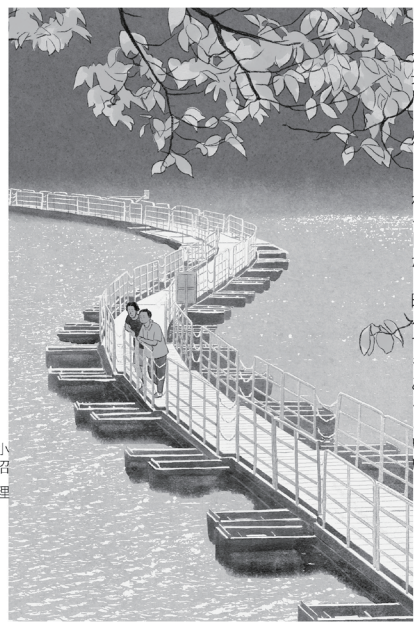


11/12 朝日新聞読書面に著者インタビューが掲載されました！

「自分をいたわりつつ、立ち止まって考えることをの大切さを教えてくれる本」
(記事より)

1日が長いと感じられる日が、 時々でもあるといい 著 小沼理



1日が長いと感じられる日が、時々でもあるといい

小沼理

日記を書くことは、日本で生きているゲイ男性の1人としての「アクティヴィズム」でもあった。その日の気分や政治への違和感や夕飯の献立を、ひとつのテキストの中で同時に語る。そうすることで、私はある属性が都合よく漂白されるのを拒み、ある属性だけに還元されることから逃れようとしていた。

(本文より)

新型コロナウイルス、東京オリンピック、元首相銃撃事件。著しい社会変化があった3度の夏、それでも生活は続いていく。迷い、怒り、喜び、苦しみ、考え、先へ向かう、注目のフリーランスライターによる3年間の日記。セクシャルマイノリティの著者による日々の記録は、差別や偏見、社会構造や政治の歪みをあらためて感じさせる内容です。何卒ご展開のほどよろしくお願いたします！

定価 本体1800円+税 / ISBN978-4-907053-57-4 / 四六判・ソフトカバー・272頁 / 2022年10月発売
【装丁】湯見陽 【装画】チョン・イヨン

FAX : 03-3294-2177

JRC宛

◎取次 = JRC tel 03-5283-2230 fax 03-3294-2177
JRCを通して全ての取次への出荷が可能です。
◎返品は無期限で承ります【返品了解者：宮川】

貴店番線印	ご注文数	タバブックス	文芸	返品条件付き注文扱い
ご担当	様	1日が長いと感じられる日が、時々でもあるといい 新刊 著 小沼理 2022年10月下旬発売 本体1800円+税 ISBN978-4-907053-57-4		

著者に会いたい 『1日が長いと感じられる日が、時々でもあるといい』
ライター・編集者 小沼理さん(30)



自分知るためつづる日々

時に友人以上の親密で、知らないはずの誰かの愚痴や暮らしの手触り、日々の愚痴が流れてくる。日記を読むのは、そこに一人の人間が生きていることを実感させる行為だ。それは文章を介した静かなアクトビームにもなりえる。

東京に暮らすゲイ男性による、2020年春からの2年半の記録。コロナ禍が収束しない中でオリンピック開催や性的少数者の存在を否定する政治家の差別発言にまじり憤りながら、愛やデモを通して自分の声を届ける方法を模索する日々と同時に、仕事と読書を、恋人と暮らす一人の若者の人生の断面が、読者の知らない文章で刻まれている。

日記をつけ始めたのは16歳の頃。人に調子を合わせすぎた癖があり、机に抱きかかると涙が流れてくる。日記を書くことで、自分を表現し、自分を認め、自分を愛する。日記は、自分を愛する力に代わった。から、今書きに記した。アクティビズムに情報を取らず、不均衡に胸を痛めている人々を救済してしまおう。自分をいたわりつつ、立ち止まって考えることの大切さを教えてくれる本である。「毎日がくり返しのようになってしまうことも、微妙な差を見られることでも生きている実感が得られることでも生きている」(タバブックス、198800)

文・板原空子 写真・外山修磨

【目次】
鍵をかけない部屋
消毒日記 2020年
隣人的 2021年
私はエラー
大丈夫 2022年
あとがき

まえがき「鍵をかけない部屋」
試し読みを公開中です。
ぜひご一読ください！

